

興味・関心を高める学習活動の在り方

身近な地域を取り入れた授業を通して -

社会科研究会議

研修員 金子和哉（川崎市立日吉小学校） 小原宏大（川崎市立長沢小学校）

堀口和也（川崎市立南菅中学校） 吉澤 晋（川崎市立野川中学校）

研修指導主事 前島和樹

主題設定の理由

本研究会議では、小学校中学校7年間に及ぶ社会科学習の中で、児童生徒にどのような力を身に付けさせたいのかを考えることから研究を始めて2年になる。本年度も問題解決能力につながる「考える力」の育成を柱に考え、単元を通じた学習過程の中で、興味・関心の高め方をテーマにした。興味をもつためには何が適切であるのか、単元の中で関心を高める場所はどこなのかなど、児童生徒の揺れ動く思考の流れの中で興味・関心を高めていくことが、考える力の育成につながるのではないかと考えた。また、教材も児童生徒の身近な地域を取り上げることで、学習問題に対しての調査活動が行える。そして、自分の身近な問題として、具体的に考えていけることは、興味・関心を高めるための方法として有効でないかと考えた。2002年から中学校の学習指導要領の中でも「身近な地域」を取り上げた学習の項目が設定されている。このようなことから、「興味・関心を高める学習活動の在り方 - 身近な地域を取り入れた授業を通して -」を研究主題に設定した。

研究の内容

1. 研究の方法

(1) 興味・関心を高める導入と資料

単元構成の組み立ての工夫から、どのように興味・関心を高めることが可能なかを検討した。特に児童生徒の興味が持続する導入時、地域素材を生かし深く追究できる切実感もてる課題設定、思考を揺れ動かす資料の提示などがあげられる。これらの工夫がいかに興味・関心を高めたのか、毎時間の見取りを中心に活動を振り返った。調査活動は身近な地域を対象としているので、自分の疑問や課題を追究する方法はいろいろと考えられる。そこで個々の児童生徒がどのような思いや考えで調査を行ったのか、記述した文章をもとに分析した。また話し合い活動では、意見交換を通して他の考えと触れ合い、さらに深い考えや新たな疑問をもって取り組んだかなど、関心の高まりが見られたかを検証した。

(2) 身近な地域を取り入れた授業

「考える力」の育成のため、興味・関心を高める学習活動の在り方について、身近な地域を取り入れた授業の実践が有効であると考えた。「身近な地域」とはそこに住む児童生徒にとって、他の誰よりも知っている場所であり、もっと知りたい場所でもある。ここでは、小学校5年生と中学校2年生の身近な地域のとらえかたや課題の持ち方、思考の深まりや広がりはどういう場面で見られるのかを検証した。小学校では今までの身近な地域学習の実践を通して、調べる対象、課題解決の手立てなど地域の課題を身近に感じ具体的にとらえる中で関心の高まりが期待できた。また、中学校では自分たちの地域に住む人々への調査や体験談を聞くことが、学習活動の出発点となるので、興味・関心が高まることが予想できた。このように小学校や中学校での学習をもとに、身近な地域の特色を生かし、一人一人の興味・関心を高めるための手立てや課題を解決するための単元構成の検討を行った。

(3) 児童生徒の見取りの活用

児童生徒の興味・関心の高まりを見取る方法として、一人一人の考えや思いを知ることが大切である。単元に入る前、一時間ごとの学習の後、そして一つの単元が終了したときに自分の考え、感じたことを記述する時間を設け、その内容から一人一人の考えたことをつかもうと考えた。授業中の発言や表情などから特定の子を見取することは可能であるが、発言が少ない子や、他の意見を聞いてどのように自分の考えが変わっていったのかなど、個々の考えを把握するには、有効な方法だと思われる。それは、記述した内容を見ると毎時間教員が設定した、興味、関心、意欲の高まりの見取りに対し、児童生徒がどのように反応したかも分かり、単元を通しての記述を振り返れば単元の中で関心を高める大切な場所はどこかについて、教員の予想と実際の児童生徒の様子から再検討することが可能である。記述という作業を通して児童生徒は学習活動を振り返り、自分の考えを整理することができる。また、今までの記録を振り返ることで、自己の考えの変化やこだわりなどをつかむことが可能となる。教員も個々にコメントやアドバイスを返すことによって、次の授業の発言や展開に効果を期待することができると考えた。興味・関心を高めるためにこのように見取りを取り入れ検証を進めた。

2. 検証授業 1 (小学校)

(1) テーマに迫るための授業の実践

興味・関心の高まりの見取り

本単元では、前半でかつての川崎の産業型の公害についての学習問題を話し合い、その解決の経緯を具体的に学習した。ここでは、今自分たちの住む川崎と昔の川崎を比較することで、児童に興味をもたせ、調査活動への関心の高まりを期待した。そして、「公害はまだおわっていない」という言葉で、産業型の公害以外にも今なお生活型の公害が未解決の問題として残っていることに新たな関心を向け、単元の後半では身近な地域や川崎市の調査活動を中心に展開した。身近な地域を取り上げることで、より子どもたちが切実な問題としてとらえ、関心を高めることができたのではないかと思う。

地域素材を取り入れた教材

単元は、かつての川崎の公害の様子を学習し、その公害がいろいろな人たちの努力で解決に向かっている経緯を調べることから入った。そして産業型の公害の被害が減っていったこととは別に、今だ、生活型の公害という問題が残っており、これからも解決に向けて取り組んでいかななくてはならないことを学習した。生活型の公害は、全国的にも問題になっている地域が多く存在するが、ここでは自分たちの住む川崎を取り上げることで、自分たちの身近な地域に目を向け具体的に調査ができるようにした。調査活動を通して、児童が身近な地域の問題として公害をとらえ、自分たちにとっても切実な問題であることを認識することで、公害という問題への関心がより高まっていくのではないかと考えた。

興味・関心の見取り? 興味・関心を見取るための指導計画

一人一人の興味・関心の高まりを見取るために、単元計画の中に興味・関心の見取りも計画として入れこんだ。それぞれの学習活動の中では、発言や観察、ノートや感想をもとに興味・関心の高まりを見取っていくように、以下のような単元構成で実践した。

資料

「煤煙を噴出する工場地帯」の写真

昭和42年川崎区

この写真はなんだろう？

- ・けむりのもくもくでているよ。
- ・工場が沢山あるね。
- ・近くにマンションもあるけど、煙くないのかなあ。
- ・川崎は工場からの煙などで公害が問題だったって聞いたよ。
- ・3年の時見学したら工場ばかりだった。
- ・喘息で苦しむ人も多かったらしいよ。
- ・でも今はあんまり煙たくないみたいだね。
- ・この写真の頃はもうどうだったのかな？

興味 関心 意欲の高まりの見取り
興味をもつ 発言、感想、観察
「煙がもくもくでている」

関心をもつ 発言、感想、観察、
「どこなんだろう？」
「川崎なんだ・・・」
「今とちがうな」
「この写真の頃ってどんな感じなんだろう？」

1960年ごろの川崎の工場地帯はどんな様子だったのだろう？

資料

「川崎の公害」
(製作資料)

調べ学習「川崎の公害の被害の様子をくわしく調べてみよう」

- ・1960年代後半は川崎では大気汚染がひどかったらしい。
- ・公害で死んじゃう人もいた。
- ・スズで洗濯物とかも真っ黒になっちゃったそうだ。
- ・工場がたくさんあって、どんどん煙とかだしていた。

関心をもって調べる
観察、作品
意欲をもって取り組む 観察、感想
関心の高まり
「もっと調べたいな」
「ほかにも被害があったのだろうか」
観察、作品、感想

資料

「今の川崎区の写真」

- ・昔は空がよどんでいたけど、今は青空も見えるね。公害はなくなったのかなあ？

興味をもつ
「昔と今ってずいぶん違うな」
発言、観察、感想
関心を高める

資料

「60年代からの統計」

- ・二酸化窒素、亜硫酸ガスなどの有害な煙は減ったんだね
- ・でも今でも工場の煙突の煙はでてるよ。
- ・たぶん、有害なガスをださないようにしたんだよ。
- ・どのようにして公害をなくしていったのかな？

「この統計がしめすことは何だろう？」
「なんで公害が減っていったのかな」
発言、観察、感想、ノート

本時

どのようにして川崎の人たちは公害をなくしていったのだろうか？

関心を高める
「どのようにしてなくしていったの？」
発言、観察、感想、ノート

資料

「川崎市の公害防止の歩み」
(年表)

- ・市では、汚れを観測する施設を作ったり、公害を防ぐ決まりを作ったりしたんだね。
- ・住民が、工場や市に公害をなくすように運動したんだ。
- ・工場では、公害の原因をなくすようにしたんだね。

川崎では、国や市、住民、工場の努力できれいな青空がよみがえったんだね

- ・今は公害の心配はないのだろうか？

関心の高まり 発言、観察、感想
「青空がひろがってよかったな」
「今は心配ないの？」

資料

喘息患者の推移

「まだ公害はおわってはいない」

(川崎公害裁判原告団の話)

興味をもつ
「なんで終わってないの？」
発言、観察、感想

私たちのまわりには、もう公害の心配はないのだろうか？

関心をもつ
「もう公害の心配ないの？」
「公害が終わっていないって何？」
発言、観察、感想、ノート、作品

調べ学習「私たちの地域や川崎市には、もう公害の心配はないのだろうか？」

Nのまちには、公害はないのだろうか？

川崎市にはもう公害の心配はないのだろうか？

意欲をもつ
「もっとくわしく調べてみよう」
「自分なりに調べてみよう」

- ・工場などが原因の公害は少なくなっている。
- ・でも第四次川崎公害裁判は道路も公害の原因だって言ってる
- ・川崎の川は少しまだ汚れているみたい。
- ・酸性雨とかの問題はまだある。
- ・川崎で高速道路反対って看板をみたよ。
- ・ダイオキシン問題で物を燃やさないようにって言われたよ。

観察、感想、作品、ノート
関心を高める
「調べて発表しよう」
「生活型公害はまだ解決されていないんだ」
発言、観察、感想、ノート

工場が原因の公害は減っても、生活が原因の公害はまだあるんだね

- ・便利なだけ、豊かなだけじゃいけないんだね。
- ・一人ひとりの心がけが大切なんじゃないかな。

関心を高める
「まだ解決されていない生活型公害を減らせないかな」
発言、感想、観察、ノート

生活が原因の公害を減らすために私たちにできることはなんだろう

関心を高める
「私たちにできることをみつきたい」

「環境を守るために私たちにできることを見つけよう」

発言、観察、感想、ノート、作品

- ・ゴミの分別をしっかりとしないと、いけないね。
- ・汚れた水をなるべく出さないことが大切だ。
- ・植物などを大切に、緑の多い町にしていこう。

意欲をもつ
「私たちにできることをみつきたいな」
観察、発言、感想

わたしたちにできることは、こんなにあるんだね

日本ではどのように環境を守る努力をしているのだろうか？

学習したことを自分たちの生活にいかしていこう

森林資源を守る学習へとつなげていく

(2) 実践を終えて

各教科学習に言えることであるが、社会科学学習においても子どもが興味をもち、関心が高まったとき、子どもたちはその学習に主体的に関わっていくことができると考える。そして、関心が問題解決への意欲となり、調べる活動・話し合う活動・考える活動などを通して、子どもたちは学び方や調べ方を身に付けていくことができると考えた。興味のもたせ方、関心の高め方は様々な方法が考えられるが、本実践で行ったように地域素材を教材化して扱うことで、子どもたちは学習を身近に感じ、興味をもつことができた。公害という大きな課題も、自分たちの身のまわりに置き換えることで関心高め、実際に調査活動をすることで関心をもち続けることができた。

単元構成や授業展開においては、児童の思考の流れにそった資料提示が求められる。地域素材の効果的な活用とともに、資料の提示においても興味・関心の高まりを検証し、また、児童の考える時間を保証していくためには、個々の関心の高まりやそれまでの思考の流れ、児童同士の高まりを見取ったうえで、その場に合った効果的な資料の提示をしていく必要性を感じた。

興味・関心の高まりは基本的に子ども一人一人違いがある。そうした意味で、個々の変化を見取っていくことが不可欠となる。本研究では、学習過程において様々な方法で個々の興味・関心の高まりを見取ってきたが、一時間の中での高まりや単元を通しての高まりを総合的に見取っていくことで、より深まりのある学習展開にしていくことができると考える。

検証授業2 (中学校 歴史的分野)

(1) テーマに迫るための授業の実践

興味・関心の高まり

生徒一人一人が学習課題に対して関心を高める一つのきっかけとして、社会的事象を自分の問題としてとらえることがあげられる。すなわち、ここでは太平洋戦争という歴史的事象が自分の住む身近な地域とかかわっていたことに注目して学習することで、生徒が課題に興味をもち、今の自分の考えや生活と当時の中学生だった人々の考えや生活を比較していくことで、さらに高い関心をもつのではないかと考えた。特に、本単元では生徒たちが身近な地域の防空壕を見学したり、身近に住む人の体験談を聞いたりすることで、現在の生活とは想像もつかないできごとがあったということを感じ、考えるかで興味・関心が高まるのではないかと思う。

歴史的分野と身近な地域

我が国の戦時下での国民生活については、小学校での歴史学習や平和学習、歴史的な遺産やテレビ、映画などの映像を通して生徒たちもよく知るところである。中学校の歴史的分野ではさらにその時代の時代像を多面的、多角的にとらえることが大切と考えた。そこで、文献や映像、歴史的遺産から調べるだけでなく、さらに生徒の祖父母や身近な地域に住むその時代を知る人の「生の声」を聞くことで、より現実味を帯びて考えることができるのではないかと考えた。

興味・関心の見取り? 興味・関心を見取るための指導計画

一人一人の興味・関心の高まりを見取るために、単元計画の中に興味・関心の見取りも計画として入れ込んだ。それぞれの学習活動の中では、発言やノート、感想をもとに、興味・関心の高まりを見取っていくように、以下のような単元構成で実践した。

いろいろな立場から戦争について調べてみよう

調べ学習（冬休みの課題）「戦争が日本に残したものを調べよう」

- ◆ 国民生活について調べよう
- ◆ 戦争を遂行した側について調べよう
- ◆ 外国（敵国、近隣国）について調べよう
 - * 田舎のおじいちゃんやおばあちゃんに聞いてみよう
 - * 平和館や歴史資料館に聞いてみよう

戦争中の野川はどんな様子だったのだろう

資料 学区にある防空壕の写真を見て

- ◆ 防空壕はどのようなものなのだろう
 - ・ 洞穴みたいだ 爆弾を防げたのだろうか
- ◆ なぜ野川に防空壕があるのか
 - ・ 野川にも空襲があったのだろうか
 - ・ なにか大事な施設が近くにあったのかな

戦争中に子どもだった人はどんな生活をおくっていたのだろう

- ・ 何を食べていたのかな？
- ・ どんな遊びをしていたのかな？
- ・ 学校でどんな授業をしていたのかな？
- ・ おこずかいはどのくらいもらっていたのかな？
- ・ 一番の悩みは何だったのかな？

子どもたちが戦争が終わったときに考えたことはなんだろう

- ・ うれしかったのかな？
- ・ くやしかったのかな？
- ・ アメリカ軍が怖かったのかな？

実際に体験した人の話を聞こう

- ・ 野川で実際に体験した人はいるのかな？
- ・ どんな話を聞いてみようかな？
- ・ 戦争中にどんな思いでいたのだろうか？
- ・ 自分たちの予想を考えてみよう

Yさんの体験談を聞く

- ◆ 戦争中の野川はどんな様子だったのだろう
- ◆ 戦争中に子どもだった人はどんな生活を送っていたのだろう
- ◆ 子どもたちが戦争が終わったときに考えたことはなんだろう

（本時）今の生活や今の中学生の考えと違うのはどんなところだろう

- ・ とても厳しい生活を送っていたんだね
- ・ 今よりもっと大人の考えを持っていたんだね
- ・ 食べ物などのものが不足していたんだね
- ・ 大人の手伝いをすごくしていたんだね
- ・ 兵隊に憧れていたんだね
- ・ アメリカが憎かったんだね
- ・ 果たしてみんな同じ思いだったのだろうか

戦争についての意見をまとめよう

意見交換「戦争についての自分たちの考えを發表しよう」

- ・ どうして戦争をやめることができなかったのだろう、反対できる力が必要だ
- ・ 戦争に正しいも悪いもない、戦争に正義はないんだ
- ・ 今の自分たちは平和に慣れていると思った、二度と悲劇を繰り返さないように自分自身の意見をしっかりとっていきいたい
- ・ 今もどこかで戦争している、自分たちに何かできることはないか

自分たちにできることを考えていこう

- ・ 自衛隊の海外派遣について意見が出てるけど調べてみたいな
- ・ 憲法や第9条について調べてみたいな
- ・ 今でも戦争をしている国々の理由は何だろう

次回の単元へ

興味 関心 意欲の高まりの見取り

興味をもつ
「戦争の持つ意味について調べよう」
関心をもつ
「こんなことがわかった」
関心を高める
戦争についての自分なりの意見をもつ 宿題の感想

興味をもつ 発言、ノート、観察

「自分たちの地域に戦争はあったのだろうか」
「この防空壕はどんなものだったのだろうか」

関心をもつ 発言、ノート、観察

「野川はどうだったのだろう」

「子どもはどうしていたのだろう」
「戦争が終わったときどう思ったのだろう」

関心の高まり

「実際に知っている人に聞いてみたり、調べてみよう」

関心をもつ 発言、ノート、観察

「戦争中の生活についてどんな話をするのだろうか」

関心をもつ
自分の気持ちと比較してみる

関心を高める

「現在の生活との違いを考えよう」
「自分の考えとの違いを考えよう」
発言、ノート、観察

関心を高める

戦争についての自分の意見を持つ
他人の意見を聞いて考える
初めの自分の意見と比較する
戦争についての意見をまとめよう
発言、ノート、観察

意欲を持つ

自分のこれからの課題を持つことができる
「自分たちにできることはなんだろう」
発言、ノート、観察

(2) 実践を終えて

単元の始めに生徒が予想した戦争についての考え方は、実際に戦争を体験した人の話を聞くことで変わっていった。戦争について「なぜ資源のない日本が戦争を起こしたのか」、「なぜ国民はこの苦しい生活に耐えていたのか」というようなこれまでの自分の意見からさらに踏み込んだ考えをもち、新たな自分の課題を見つけた生徒が多かった。これは、その生徒の興味・関心が体験談を聞いたことや効果的な資料の提示によって高まったものだと考えられる。さらに、その興味・関心の高まりは、その時代を生きる人々の願いや思いをとらえ、21世紀に生きる自らの課題として、他者とのかわりをより深く考えることに結びつくだろう。

だが、それらの意見を引き出す教員の発問の仕方やタイミングによって生徒の考えの深まりがどのように変わるかを検証していく余地がある。また、興味が高まって教員の発問の仕方によって深まりが変わることや、発言の少ない生徒の考えの深まりの見取りがこれからの課題になるだろう。

本単元の中で、地域に古老から戦争体験談を聞いた生徒は、様々な戦争に対する見方や考え方をもち、その考え方の違いを話し合うことで興味・関心の高まりが見られた。それは生徒が学び合い、お互いに高まり合うという点からも、話し合いの重要性を改めて感じることができた。

研究のまとめと今後の課題

小学校の検証授業で取り扱った「公害はまだ終わっていない」という言葉は、児童の思考を揺れ動かすための資料として有効であった。また、中学校の検証授業で取り扱った「戦争体験者との出会い」も戦争を身近に実感することのできる資料として適切であった。このように児童生徒の思考の流れを考えて、適切に資料を提示することで興味・関心の高まりが見られた。その高まりが学習意欲となり調査活動を主体的に行ったり、調査活動の報告会を通して、クラスの人々の考え方に刺激を受け、さらに活発な話し合いを行ったりする姿からも「考える力」の育成につながっていると考えられる。身近な地域を課題として取り上げることによって自分の身近な課題として具体的に考え調べることができるので、興味・関心が高まり「考える力」を育成する場面で有効であった。

しかし、学習過程の中のどこに、どのような形で資料提示していくことが望ましい形なのか、授業者が児童生徒をどのように見取っているのかが課題となってくることもわかってきた。一つの資料を提示してもそこからとらえられる社会的な見方や考え方には、個々の違いがある。本研究会議の指導案にも単元構想の中に「興味・関心・意欲の高まりの見取り」という項目を立て、効果的な資料提示に努めてきた。だが、授業者による児童生徒の見取り方によって、有効であるはずの資料が時として思考の妨げになることがわかった。児童生徒を正確に見取り、どのような形で指導に生かしていくのかという「指導と評価の一体化」のとらえ方が課題になってくる。また、小学校中学校における社会科学学習を考えていく過程で、評価のとらえ方に違いが生じることもあったので、共通理解していかななくてはならないだろう。

最後に、本研究を進めるにあたり、ご指導、ご助言をいただいた先生方、また、検証授業の会場をご提供いただいた長沢小学校、野川中学校の校長先生をはじめ先生方に心より感謝申し上げます。

【参考文献】 ・北 俊夫著 『小学校学習指導要領の展開 社会科』 明治図書 1999年

・渋澤文隆・佐伯真人・大杉昭英編著

『中学校学習指導要領の展開 社会科』 明治図書 1999年

【指導助言者】

川崎市立東小倉小学校長（平成13年度川崎市立小学校社会科研究会長） 近藤 真市
川崎市立日吉中学校長（平成13年度川崎市立教育研究会社会科部会長） 久保田良一
川崎市教育委員会学校教育指導主事 小島 康宏